

宰府画報

絵師調査事業
広報誌
第6号
2021年5月
(令和3年)
発行
太宰府市教育委員会
文化財課

太宰府の絵師展が始まります

来たる6月5日(土)から太宰府市文化ふれあい館で、太宰府の絵師展「秋圃と拝山―太宰府に偉才あり―」が開催されます。この展覧会は、江戸時代後期の筑前を代表する町絵師である齋藤秋圃と、明治大正期に活躍した文人吉嗣拝山について紹介するもので、太宰府の絵師調査事業としては平成30年に開催された「太宰府の絵師 齋藤秋圃展」に続く、2度目の展覧会になります。以下、展示の各コーナーの概要をご紹介します。

1 齋藤秋圃と齋藤家資料
齋藤秋圃とその息子梅圃の作品や画稿(下書き)などを借用資料を交えて展示し

2 吉嗣拝山と吉嗣家資料
詩書画の名人として全国にその名を知られた吉嗣拝山の作品を中心に、齋藤秋圃に筆を習い絵師として活躍した吉嗣家初代の梅仙、拝山の息子で父と同じく書画の道に進んだ鼓山の作品や資料を展示します。拝山が与謝蕪村の作風にならって描いたという《鍾馗図》(下左図)、梅仙と鼓山の祖父・孫合作《飲中



展覧会ポスター

詩書画の名人として全国にその名を知られた吉嗣拝山の作品を中心に、齋藤秋圃に筆を習い絵師として活躍した吉嗣家初代の梅仙、拝山の息子で父と同じく書画の道に進んだ鼓山の作品や資料を展示します。拝山が与謝蕪村の作風にならって描いたという《鍾馗図》(下左図)、梅仙と鼓山の祖父・孫合作《飲中

3 絵師調査事業の紹介
太宰府市でおこなっている絵師調査事業は平成26年度にはじまり、今年で8年目を迎えます。その間、地道な資料整理や分析を進めながら報告書の刊行、齋藤家資料の市指定文化財への登録、特別展の実施と、その成果を広く市民に還元してきました。このコーナーでは事業の概要や最新成果をパネルと資料で紹介いたします。令和3年3月に刊行されたばかりの印章報告書に関連した、吉嗣家に伝わる印章や印箋のほか、現在調査中の資料(画稿類等)を展示します。見どころたくさんさんの絵師展。観覧料は無料となっております。ぜひお越しください。(木村純也・文化財課)

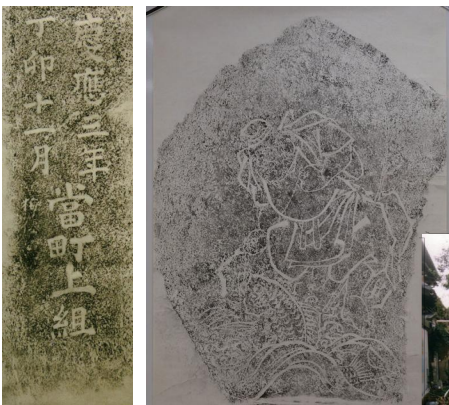


(右) 齋藤秋圃《楊柳観音図》個人蔵
(左) 吉嗣拝山《鍾馗図》個人蔵
※会期中に一部展示替えを予定しています

太宰府の絵師とえびす様

太宰府市内には約30体のえびす石神が祀られ、商売繁盛や五穀豊稔、宿場守護などを願って、地域の人々の手で大切に守られてきました。石像のほとんどは石に線彫りされたものですが、その原画をはじめ、「えびす祭り」の直会(祭りの最後にお供えをいただく行事)の席で掛けられてきた掛軸には、太宰府の絵師たちの作品が多く残されています。

吉嗣梅仙が手掛けた石像の一つに、「慶応三年(1867)」「梅僊(梅仙)」の銘を持つ三条町のえびす石像があります。波間から大きな鯛のかかった釣糸を手繰り寄せるえびす様をいきいきと描いています。石像の拓本を採ることで、銘文の中から梅仙の名が浮かび上がりました。身近な絵師の存在が、太宰府に多くのえびす石像が置かれる契機の一つとなったと考えられます。(井上理香・文化ふれあい館)



(右) えびす石像(線刻)
(中) 石像表面の拓本
(左) 石像裏側の拓本
銘文に梅僊(梅仙)の文字が見える

慶應三年 當町上組
丁卯十一月 梅僊寫

逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介します

齋藤秋圃作

【蘭亭曲水図屏風】

書聖王羲之の故事

中国東晋時代の政治家で書家として名高い王羲之が、会稽山の蘭亭（※1）に知人らを招いて上巳（3月3日）の禊ぎを行った後、流水に盃を浮かべてそれが自らの前に来るまでに詩を詠む趣向の宴を催したという故事を描いています。このときの詩集に王羲之が記した序文が「蘭亭序（※2）」の書傑作として古くから手本とされ、また清らかで風雅な故事の趣は、絵画や工芸品の題材として今もひろく愛好されています。

梅花の宴と曲水の宴

さて、どこかで聞いたことがある故事だなとピンときた方もいらつしやるでしょう。それもそのはず。新元号「令和」の由来と



紙本着色 江戸時代・嘉永4年（1851）頃 個人蔵

なつた大伴旅人の梅花の宴と、そのとき詠まれた和歌に付された旅人の序は、この王羲之の故事にならつたものとされています。一方の曲水の宴も、奈良時代以前に中国から日本に伝わつたといひ、神事を兼ねた宮廷行事、あるいは私的な宴として流行しました。全国に先がけ昭和38年（1963）に太宰府天満宮で曲水の宴が復原され、現在に至っているのは周知のことです。



曲水宴の部分図

さいぶつくしの逸品

作者の齋藤秋圃は70歳頃から亡くなるまでの約20年間を太宰府の地で過ごしています。画面には80歳の年紀があり、本作品は今から170年ほど前の太宰府で制作されたと考えられます。向かつて右の画面（写真上）に王羲之のいる蘭亭とそこへ集う一行が、左の画面（同下）には大らかに賑わう曲水の宴の様子が、秋圃らしい筆力で生き生きと描かれています。

太宰府にちなむ主題を、太宰府の絵師が、太宰府の地で描いたという、まさに太宰府づくしの逸品です。（井形栄子・絵師調査チーム）

【キーワード】

※1 蘭亭 蘭渚（現在の浙江省紹興市）の地にあったという東屋（湖畔や庭園に設けられた休憩所のような建物）のこと。

※2 蘭亭序 宴の際に酔つて即興で書かれた行書の草稿が名筆とされたが、原本は伝わらず、模本とされるもののみが伝わる。324字から成り、宴の趣旨や情景、人生観などが綴られている。

「秋圃と拝山展」は、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策などにより、開催期間の変更や中止等の可能性がございます。あらかじめご了承ください。

いちまい 賞 鑑 稿 画

齋藤家資料 【曲水宴図】



紙本墨画淡彩 38.4 × 53.4 cm 天保3年（1832）

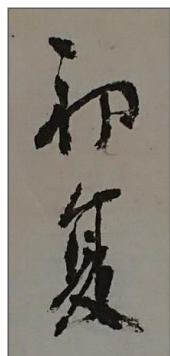
「逸品探訪」の作品と同じく曲水の宴が主題です。奇岩の脇を流れる川から曲水をつくり、盃を流す童子と詩作に興じる高士たちの姿を正面から見た構図で描いています。曲水の場面を取り囲んで、向かつて右上の岩陰では童子たちが盃の準備に忙しく、一方で左側の高台では、詩作もせずに談笑したりくつろいだり、実に楽しい様子の子の高士たちが描かれています。盃が来るまでに詩を作れなければ、罰として3杯飲まねばならなかったそうですが、果たして罰になつたのでしょうか。

裏面に「三月三日／天保三年／辰ノ春日写／千二十四番／齋藤梅圃藏」は改行」との墨書があり、この図は秋圃の息子の梅圃が写したものとされます。この時梅圃は17歳。「千二十四番」という番号は、梅圃が数多くの絵を目にし、学んでいたことを示唆しています。梅圃の画技や、父秋圃との協業の実態などは不明な部分が多く、今後の研究課題のひとつです。（井形栄子）

ひとこと ぐずし字

【初夏】

5月から6月にかけて徐々に気温が上がり日差しも強くなる「初夏」の季節。今年はずでに夏日を迎える日もありますが、例年はまだ暑さも強くな、すがすがしい時期です。



今回ご紹介するのはこの「初夏」という字です。「初」という字は左側の「ネ」が少し省略されていますが何となく読めそうです。「夏」はどこか違う文字に見えます。これは異体字といつて近代以前はよく使われていた文字になり「夏」と書かれています。

この資料は、明治時代の官僚で南画や篆刻にも通じた片岡長信という人物が、作成

した印章を、印箋と呼ばれる紙に捺印して制作年などの情報を記したものです。「千子初夏呈 拝山先生乞正」と書いてあり、明治45年（1912）の初夏に吉岡拝山に贈つたもののようにです。

なお、当時は旧暦が一般的に用いられていたため、夏とは4月から6月を

意味しており、「初夏」とは夏のはじまりである4月のことを指しています。（木村純也）

